

# 日本昔話絵本と朝鮮昔話絵本の構造分析

絵本『かにむかし』と『あずきがゆばあさんとトラ』を中心に

尹惠貞

## 1 はじめに

古今東西の昔話を眺めると、そこにはよく似た話がある。例えば、グリム童話集の「親指こぞう」(2007: 107-23)、日本の「親指太郎」(関敬吾 1978: 39-44)、韓国の『チョマギ』<sup>(1)</sup> (ホン・ヨンウ 2012)等である。最近では、昔話を文字で読めるだけでなく、絵本という形でその姿をよく目にする。本稿では、日本の昔話絵本『かにむかし』(木下順二・清水崑 1976)(以下、『かに』とする)と、韓国の昔話絵本で日本語翻訳版『あずきがゆばあさんとトラ』(チョ・ホサン&ユン・ミスク 2004)(以下、『あずき』とする)の構造分析をする。具体的には、①構造分析の行為分析をすることによって、『かに』と『あずき』のプロットを比較し、その類似性を考察する。②構造分析の行為項分析をすることにより、『かに』と『あずき』の登場人物の類似性および相違性に注目し、日韓の文化的独自性を解明する。③昔話は口承芸術とされているが、その伝承媒体が今や絵本となっているので、印刷によって出版された閉じられたテキストと解釈される一方、絵本は読み聞かせ・読み合い<sup>(2)</sup>を基本の読み方としている開かれたテキスト、という性質を併せもつことを述べ、この併存性が①と②の構造分析とどのように関わっているのかを声の文化から明らかにすることを目的とする。

まず、昔話の構造論の始祖と言われるプロップ(1983: 41-103)が提唱した物語には31種類<sup>(3)</sup>の機能、すなわち登場人物の行為があり、これは物語における定項としての位置を占めるものである。プロップの規定した機能は線条的なもので、ある機能の結果から次

なる機能を決定していったので、結果として反対の機能が起こりうることを予想していない、というあいまいさが残ってしまった。そこで、プロップの線条的な多くの機能を二項からなる対にまとめること、例えば、欠如と欠如の解消や禁止と違反のような、より抽象的な構造で規定し直すグレマス(1988: 252-66)によって、登場人物の行為の構造分析を行う。次に、機能を互いに繋ぐための補助要素として登場人物の属性、すなわち登場人物の呼び名があり、これは物語の可変項としての位置を占めるものである。この点においても、グレマス(1988: 223-51)が著書で取り上げている行為項によって分析を試みる(バルト 1979: 71-7)。この行為項分析は、物語の登場人物たちが何者であるかを基準とせず、彼らは何を行うかを基準とする。以下、『かに』と『あずき』の梗概を示す。なお、登場人物に関しては、絵本に出現する通り平仮名や片仮名で示すと混乱を来すので、絵本を直接引用する際には絵本通りに示すが、その他の部分は漢字を用いる。

## 2 梗概

### 2.1 『かにむかし』

『かに』は、関(1979: 107-84)によるといわれる「猿蟹合戦」<sup>(4)</sup>のこととされている。

むかし、蟹が塩くみをしようと思って浜辺へ出ると、砂の上に柿の種が落ちており、これを庭に蒔こうと思って拾った。蟹は早速柿の種を蒔き、毎日水や肥やしをやっては芽が出るように、芽が出たと思ったら次は木になるように、と願い、木になったと思ったら実をみのらせるように、実がなったと思ったらはやく熟れるように、と願った。

柿の木が実を赤く実らせたので、蟹は待ってました、と喜んで柿の木に登ろうとするがうまくいかず、何度も落ちてはまた登ってと繰り返しているところに、山の上から猿が現れた。猿は蟹に何をしていると聞いたら、柿をもごうとするけれども、足が言うことをきかない、と答えた。猿は代わりにもいでやると言って、木に登っては自分が食い始めた。蟹はびっくりしてもいで寄こせと猿に向かって言うと、猿はまだ青い柿をもいで投げ、それが蟹の甲羅にあたり、蟹は潰れてしまった。その時蟹の子どもがたくさん這い出して、その子どもたちは石の間に隠れ、太ってくるまで時を待ち、自分たちで蒔いた黍で黍団子を作っては、猿に仇討ちしに出かけることになった。

子蟹どもが歩いていると、栗に出会った。

「かにどん かにどん どこへ ゆく」

「さるのぼんばへ あだうちに」

「こしに つけとるのは そらなんだ」

「にっぽん いちの きびだんご」

「いっちょ くだはり、なかまに なろう」

「なかまに なるなら やろうたい」

このようにして、蜂、牛の糞、はぜ棒、石臼に次々と出会って仲間になった。

仲間になったものたちと共に猿のぼんばに行ったが、猿がいないので栗は囲炉裏の中へ、子蟹どもは大きな水桶に、蜂は戸口の敷居のところにとまると止まり、牛の糞は戸口の敷居の外のところ黙って座り、石臼ははぜ棒に突き上げてもらって、軒の下の牛の糞の脇のところへ立った。

猿が帰って来るや、栗は猿の背中にはねくりかえり、猿は土間まで飛んでいき水を被ろうと思ったが、手を突っ込んだところで子蟹どもが体中に這い出してきた。猿はびっくりして戸口に逃げたところで、蜂が猿の頭を刺し、よく分からなくなった猿は、戸口をひと足飛びだしたところ、牛の糞で滑ってその拍子にはぜ棒で足が引っかかり、はぜ棒が頭を打ったと思ったら、上から石臼が落ちて猿はべちゃんこになってしまった。

以上が『かに』の梗概である。

## 2.2 『あずきがゆばあさんとトラ』

続いて『あずき』の梗概を記す。崔仁鶴(1976: 67)によると前述の『かに』は朝鮮の昔話であるトラ退治の話に似ており、『あずき』もトラ退治の昔話を再話し絵本にしたものである。3.2で詳述するが『あずき』の主要テーマを本稿では「救助」と考える。

むかし、ある山里に婆さんが住んでおり、畑で小豆を育てていた。畑で働いていると、裏山から虎が現われ、婆さんを食べようとした。婆さんはこの小豆が実って小豆粥一杯たべるまで待ってくれと頼み、虎は小豆までくってやろうと思い、小豆ができる頃また来ると言って帰っていった。

秋になり、小豆粥をたくさん作って、婆さんは悔しくて悲しくて泣きだしていた。すると、たまごがコロコロ来ては、

「ばあさん ばんさん なぜなの？」

「あずきがゆを 食べおわったら トラに 食われてしまうから」

「わたしに 1ばい くれたら たすけてあげる」

婆さんはたまごに小豆粥をよそってやり、たまごはべろりと食べて、かまどの火たき口に入って、灰の中にすっぽり隠れた。次に、スッポンがノソノソやってきて、ばあさんと同じ問答を繰り返し、水がめの中にチャポンと入った。それからうんちがべちゃべちゃやってきて、また婆さんと同じことを繰り返し土間にべったり寝そべった。さらにきりがピョンピョンとんできて、同じことを繰り返し土間にびんと立った。続けて石臼がゴロゴロ転がってきて、土間の戸口の上にぶらりとぶら下がった。それからむしろがヒラヒラやってきて、庭に出てどさりと寝転んだ。最後に背負子がガタガタやってきて、庭の隅にそっと立った。

夜になって、とうとうトラが「ばあさん ばあさん 今日こそ食ってやる！」とやってきた。しかし、土間が真っ暗なので火をつけようとしたら、かまどの火たき口にいたたまごがとび出してきて虎の目にあたり、虎は目を洗おうとして、水がめに手を入れたらスッポンに手を噛まれ、びっくりして後ずさりした虎はうんちで転んだ。するときに虎のおしりを刺し、慌てて外に逃げると、ぶら下がっていた石うすが落ちて、虎を潰し、そこへむしろがやってきて虎を巻き、背負子が虎を担いで川へ投げた。

以上が『あずき』の梗概である。『かに』は朝鮮の昔話であるトラ退治の話に似ているという先行研究を前述したが、以下『かに』と『あずき』のどこに類似性と独自性があるのかを明らかにするために構造分析を用いる。この方法を用いるのは、文化の違いを超えた形式という枠組の中で、内容が如何に文化によって規定されるかということに対して洞察を得るのに役立つ(ダンダス 1980: 172)からである。すなわち、文化の違いを超えた形式を構造分析の行為分析で明らかにし、内容が如何に文化によって規定されているかを構造分析の行為項分析で浮かびあがらせるのである。

### 3 構造分析

#### 3.1 行為分析

前述した通り、プロップは物語に 31 種類の機能があり、これは登場人物の行為を表わしているという。物語の具体的な内容は絵本のテキストを引用し、それに対応する機能についてはメタ言語をプロップに習い、註(3)で記述した番号と共に示す。メタ言語の定義に相当する絵本の引用箇所を下線部を引く(下線部筆者)。該当するメタ言語や絵本の引用箇所がないところには、斜線を引く。なお、主体・反対者や補助者は次節で述べる行

為項分析で用いるものであるが、便宜上ここでも用いる。表1で絵本『かに』を示し、表2で絵本『あずき』を示す。

表1 『かにむかし』

機能 (メタ)	物語	絵本『かに』のテキスト
8 加害・欠如		①まだ あおい かおをして おもたそうに ゆれておった おおきな かきを、いきなり ひんもいで <u>びゅーんと</u> なげつけた。すると その かきは <u>かにの こうらに</u> どすんと あたって、かにには <u>べしゃりと つぶれてしまうた。</u>
10 対抗開始 及び 11 出立・出発		② (つぶれた <u>かにの こうらの</u> したから、 <u>かにの</u> こどもが、(…) <u>たくさんに</u> はいだして <u>きたそうな。</u> ) <u>…きびだんごを</u> <u>こし</u> に <u>つけて、みんな</u> そろうて <u>おやがにの</u> <u>あだうち</u> に <u>さるのばんば</u> というて <u>さるが</u> <u>すんでおる</u> <u>ところへ、いよいよ</u> <u>でかける</u> ことになった。
12 補助者の第一機能		③…あるいてゆくと、まず、ばんばんぐりに <u>ゆきおうた。</u> <u>ばんばんぐりが</u> <u>いうには、</u> 「 <u>かにどん</u> <u>かにどん、どこへ</u> <u>ゆく</u> 」
13 主体の反応		④そこで <u>こがにが</u> <u>こえを</u> <u>そろえて、</u> 「 <u>さるのばんばへ</u> <u>あだうちに</u> 」
再度 12 補助者の第一機能 13 主体の反応		③' ( <u>きびだんご</u> )を「 <u>いっちょ</u> <u>くだけり</u> <u>なかまに</u> <u>なるう</u> 」 ④' 「 <u>なかまに</u> <u>なるなら</u> <u>やろうたい</u> 」
14 獲得		⑤ばんばんぐりに <u>きびだんごを</u> <u>いっちょ</u> やって、ばんばんぐりは <u>なかまになった。</u> (③から⑤が、はち・うしのふん・はぜぼう・石うすと繰り返される。)
16 闘い		⑥i…ばんばんぐりは <u>もう</u> <u>がまん</u> しきれんように <u>なるまで</u> <u>き</u> <u>ばった</u> ところで、 <u>さるの</u> <u>せなかへ</u> <u>ばーんと</u> <u>はねくり</u> かえった。 ⑥ii…とびあがって <u>どまへ</u> <u>とんで</u> にげて、 <u>みずを</u> <u>かぶろう</u> (…) <u>みずおけの</u> <u>みずへ</u> <u>しゃっと</u> <u>手を</u> <u>つっこんだ</u> ところが、 <u>まって</u> おった <u>こがにどもは</u> <u>そうれっと、</u> (…) <u>さるの</u> <u>からだへ</u> <u>とっついて、</u> ⑥iii…戸口の <u>ところへ</u> にげた <u>ところを、</u> <u>うえから</u> <u>ぶーんと</u> <u>はち</u> <u>は</u> <u>まいおりて、</u> <u>さるの</u> <u>あたまを</u> <u>じいーん、</u> <u>とするほど</u> <u>さした。</u> ⑥iv…戸口を <u>ひとあし</u> <u>とびだした</u> ところが <u>そこには</u> <u>うしのふんが</u> <u>すわって</u> おった <u>もんで、</u> <u>さるは</u> <u>つると</u> <u>すべった</u> ⑥vひょうしに、 <u>そこに</u> <u>たって</u> <u>まって</u> おった <u>はぜぼうに</u> (…) <u>はち</u> に <u>さされた</u> <u>あたまを</u> <u>はぜぼうが</u> <u>ごつうんと</u> <u>ぶった</u>
18 勝利 19 (欠如の解消)		⑦おおきな <u>石うすが</u> (…) <u>おちて</u> きて、 <u>さるは</u> <u>ひらとう</u> <u>へしゃげて</u> しまうた <u>そうな。</u>

表2 『あずきがゆばあさんとトラ』

機能(メタ言語)	物語 絵本『あずき』のテキスト
8 加害・欠如	①ある日、おばあさんがあずき畑ではたらいていると、うら山からトラがおりてきて、おばあさんをたべようとしてました。
10 対抗開始及び 11 出立・出発	
12 補助者の第一機能	②(土間で)おばあさんが泣いていると、たまごがコロコロころがってきました。 「ばあさん、ばあさん、なぜ泣くの？」
13 主体の反応	③「あずきがゆを食べおわったら、トラに食われてしまうから」
再度、12 補助者の第一機能 13 主体の反応	④「わたしに1ばいくれたら、たすけてあげる」 おばあさんは、たまごにあずきがゆを ⑤よそってやりました。
14 獲得	⑥ i たまごはべろりと食べおえると、 <u>かまどの火たき口に入って、灰のなかにすっぽりとかくれました。</u> ⑥ ii スッポンはべろりと食べおえると、 <u>水がめのなかにちゃぽんと入りました。</u> ⑥ iii うんちはべろりと食べおえると、 <u>土間にべったりとねそべりました。</u> ⑥ iv きりはべろりと食べおえると、 <u>土間にびんと立ちました。</u> ⑥ v 石うすはべろりと食べおえると、 <u>土間の戸口の上にぶらりとぶらさがりました。</u> ⑥ vi むしろはべろりと食べおえると、 <u>庭に出てどさりとねころびました。</u> ⑥ vii しょいこはべろりと食べおえると、 <u>庭のすみに行ってそっと立ちました。</u>
16 闘い	⑦ i 夜になると、(…)「ばあさん、ばあさん、今日こそ食ってやる！」(…) かまどの火たきくちをまわしました。その時、かまどの火たき口にかくれていたたまごがとびだして <u>トラの目をビシヤリとひっぱたきました。</u> ⑦ ii …すると、 <u>スッポンが手にガブリとかみつきました。</u> ⑦ iii トラはびっくりしてあとずさると <u>うんちですべてベシヤリところんでしまいました。</u> ⑦ iv …きりがトラのおしりをブスリとさしました。 ⑦ v …とびらの上にはぶらさがっていた石うすがドサリとおちて、 <u>トラをおしつぶしました。</u> ⑦ vi そこへむしがやってきて、 <u>トラをグルグルまきにして、</u>
18 勝利	⑧(トラを)川にドボンとほうりなげました。
19 欠如の解消	⑨(…) たすけられて、おばあさんは、 <u>トラに食べられることなく、いつまでも幸せにくらしたとき。</u>

『かに』では、蟹のべしゃりとつぶれたことで、「欠如」が明確に表示されているが、『あずき』では、虎が婆さんを食べようとしただけで、最初の登場では「欠如」までは至らず、「加害」の予告があっただけだった。次に、登場人物との関係で、『かに』では、親蟹が倒れたことで子蟹どもが反対者である猿に仇討の機を伺い、黍を育て団子を作ることで、猿への対抗意識と猿のばんばへと出かける出立・出発が行われるのである。これに対して『あずき』では、婆さんは「加害」予告を受けたに留まる。婆さんの救助は婆さんの住まいの土間付近で行われるので、婆さんには『かに』のような、反対者への対抗意識やどこかへ出かけるという出立・出発を見ることはできない。そして、後節で述べるが主体は偶然に補助者と出会うのだ。『かに』では補助者から「かにどん かにどん」と2回呼びかけられ、子蟹たちは既に出立・出発した途中であることから「どこへゆく」と質問されているのに対して、『あずき』では補助者から「ばあさん、ばあさん」と2回呼びかけられ、ばあさんは家にいるのであるから「なぜ泣くの？」と質問される。

補助者の第一機能に対する主体の反応として、『かに』では、まさに猿のばんばへ「出立・出発」すると答え、『あずき』では、「加害」の予告を受けたに留まっていたが、「あずきがゆを食べおったら、トラに食われてしまうから」と、加害が差し迫ってきた、という答えとなっている。これに続いて『かに』では、子蟹どもが腰に黍団子をまいているので、それをもらいうけたら仲間になるという補助者のさらなる機能と、仲間になるならやろうと主体の反応が示されている。『あずき』でも、あずき粥を1ばいくれたら、たすけてあげるといふ補助者のさらなる機能と、「よそってやりました」といふ主体の行動としての反応が見受けられる。

続いて、『かに』では黍団子を補助者にやって、仲間になったということが全く同じテキストで繰り返され、補助者の獲得を示している。しかし、『あずき』では「べろりと食べおえると」というテキストは補助者それぞれ全く同じであるが、救助が主要テーマであるので、小豆粥を食べおえるだけでは足りず、補助者がそれぞれの定位置に付くことで、獲得になるのではないかとも考えうる(図2、図4参照)。何故ならば、『あずき』では、対抗意識や出立・出発が表れないために、獲得のタイミングがはっきりしない。しかし、補助者の本来の用法に従い定位置に付いているのであるから、『あずき』においても、小豆粥をべろりと食べおえることで「獲得」が生じ、その後の定位置に付くことは「獲得」という機能の実現の仕方(表2の各波線部分)であり、プロップの提唱する機能においては、ここは定項の機能に含まれず、可変項となるであろう。

それから、『かに』では仲間を得た主体が猿のぼんばへ移動をした。『あずき』では前述した通り、対抗意識と出立・出発が欠けているので、もちろん移動はない。

『かに』では猿のぼんばへ到着後に、主体と補助者が闘いのための定位置に付くことをどのように解釈すべきだろうか。ここも『あずき』の「獲得」同様「闘い」という機能の実現のための仕方であると考えべきである。したがって、定位置につくことはやはり可変項であるとする。

このように、プロットの規定した機能で『かに』と『あずき』の類似性が明らかになったのは確かであるが、表1と表2の通りその機能を線条的に時系列に表わすことができたに留まる。そこで、グレマスの二項からなる対にまとめると、より抽象的に構造をとらえることができるので、以下ではその分析図を示す。

表3 『かに』の構造分析図

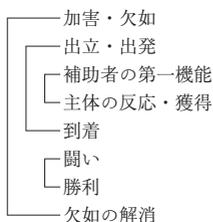
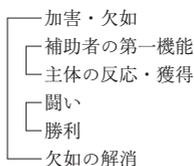


表4 『あずき』の構造分析図



両表を見比べると、表3においては補助者の第一機能と主体の反応・獲得を出立・出発と到着が挟みこむ形となっているが、それ以外は表4と同じなので両者の類似性を知ることができる。

### 3.2 行為項分析

行為項分析によって、『かに』の物語の主要テーマである「仇討」を整理できると考える。何故ならば、「はじめに」で述べたとおり物語の登場人物たちが何者であるかを基準とせず、彼らは何を行うかを基準とするからである。すなわち、主体 vs 客体、送り手 vs 受け手、反対者 vs 補助者に分けることができる(グレマス 1988: 224-38, バルト 1979: 72)。また、前述したように崔仁鶴(1976)によれば『あずき』は昔話であるトラ退治を再話したものである。とするならば、物語の主要テーマを「退治」と考えるべきとも思える。しかし、本稿は絵本『あずき』を取り上げるので、本絵本の主要テーマは絵本の最後のテキストでも述べられている通り「たすけられて、おばあさんは、トラに食べられることなく、いつ

までも幸せにくらしたとさ」とあるように、おばあさんの「救助」と考えるべきであり、やはり行為項分析で整理できると考える。

以上から、両者の行為項は以下のとおりであり(下線は筆者)、該当なしのところは斜線を引く。

表5 行為項分析

物語 行為項	絵本『かに』	絵本『あずき』
主体	本来の主体であった蟹 → 子蟹ども	婆さん
客体	本来の客体であった柿の種 → 柿 子蟹どもの客体は黍団子	本来の客体であった小豆 → 小豆粥
送り手		婆さん
受け手	子蟹ども	婆さん
反対者	猿	虎
補助者	栗、蜂、 <u>牛の糞</u> 、はぜ棒、 <u>石臼</u>	たまご、スッポン、 <u>うんち</u> 、 きり、 <u>石臼</u> 、むしろ、背負子

登場人物の属性は物語における可変項としての位置を占めることを述べた。したがって、物語の登場人物の行為(プロップ 1983, 崔 1976)が、どれほど近似していても、登場人物の属性の違いにより、我々読者もしくは聴者が受ける物語のイメージは甚だ異なる。つまり、「文化圏で好まれる登場人物の類型が違う」(池上 1982: 267)ので、登場人物の違いにより、物語が伝承される文化圏の差異を知ることができると思われることから、分析を通じて日韓の文化的独自性を明らかにすることを試みる。

まず、主体から見ていく。『かに』の本来の主体は蟹であるが、反対者の猿にやられて、主体は子蟹どもに代わる。『あずき』においては、終始主体は婆さんである。

次に、客体であるが、『かに』では柿の種であったがそれが柿となる。また、主体が子蟹どもに代わると対象も黍団子に変わるのである。これに対して『あずき』においては、本来の対象は小豆で、それに少しの変化が加わって小豆粥となる。客体が原型を残しつつも姿を変えている点で『かに』の黍団子とは異なる。

続いて、送り手であるが、『かに』では正確な記述はなく、テキストでは柿の種は「どこからか どうして きたもんだ」としており自然発生的であろうか。これに対して『あずき』では、送り手をばあさんとしたが、対象である小豆はばあさんが小豆畑で植えたものである。

受け手であるが、『かに』では本来蟹であったが、猿が投げた柿にあたり潰れてしまったため、子蟹ともに受け手が代わった。『あずき』では、ばあさんである。パルト(1979: 72)によると、主体が受け手と一つになるのはよくあることだとされる。理由としては、主体の願望・探索の対象とそれを受けるものが同じになるのは至極当然であるためである。

表の順番からすると反対者についてまず述べるべきであるが、論述の関係で先に補助者について述べる。前述した客体が代わったあとに、それを分け与えることで補助者を得ることになる。『かに』では、黍団子を分け与え、栗・蜂・牛の糞・はぜ棒・石臼が補助者となる。客体であった柿ではなく、新たな対象と言える黍団子を補助者に分け与えていることになる。『あずき』においては、本来の対象であった小豆ではなく、小豆粥をたまご・スッポン・うんち・きり・石臼・むしろ・背負子に分け与えて補助者を得ている。主体が補助者に出会うのは偶然的出来事で、『かに』では仇討に出立・出発するので、その道すがら補助者たちと出会う。しかし『あずき』においては、婆さんを救助に来ると考えるので、婆さんの家の土間付近にあったものが近づいて、出会う形となっている。

最後に、反対者は『かに』では猿、『あずき』では虎である。猿と虎は物語の展開に二度登場する。すなわち、どちらも物語が展開する中で、反対者が誰であるかを紹介するためにまず一度登場する。それから『かに』は猿に対する仇討のための物語であることから、主体と補助者たちが猿のばんばへ着いて暫くすると猿が再び登場し、仇討が展開される。これに対して、『あずき』の方は虎からの救助の物語であることから、虎が再び登場し、虎退治が行われて婆さんの救助へと物語が展開される。

反対者について言及したものとしては、足立悦男・李普銀(2008)の研究がある。当該先行研究は、昔話を伝統文化の回復、継承という視点からではなく、現代文化としての昔話という視点から見直して、児童文化の比較研究は日韓相互の教育を支える不可欠の基礎分野であるとしつつ、本稿で取り上げている木下順二・清水崑の作品である『かにむかし』と、パク・ユンギョ&ペク・ヒナ(2006)の作品である『あずき粥ばあさんと虎』を取り上げている。反対者である「さる」と「トラ」についての本先行研究の言及は傾聴に値する。ここでは、赤祖父哲二編『日中韓言語文化事典』を引用し、日本の「さる」は、民俗的には聖俗の両義性をもっているとしながら、

昔話に多く登場する猿は、俗的な性格のものが多い。『かにむかし』の猿もそうである(足立・李 2008: 72)。

としている。この俗的性格が世間一般・民間という意味であるならば、主体である蟹も世間一般・民間という意味の俗的な性格となろう。その上で、『かに』における「さる」と主体である蟹の力関係を考えると、「さる」によって親蟹はやられてしまったのであるから、「さる」の力が強いと言える。しかし、子蟹どもは補助者の助けを得て、自らも直接「さる」と闘うので、補助者の援助を受けてはいるが、力はこれで拮抗していると言えるだろう。

これに対して「トラ」については、齋木恭子の「虎が権力者の代わりとして、あるいは民間信仰の対象として、しばしば登場するのも韓国昔話の特徴です。たとえどんな恐ろしい虎でも、最後におばあさんや子どもなど力の弱い者に退治される話は少なくありません。これは、民衆が、自分たちを苦しめる悪い権力者や外敵に見立てて、痛烈な批判と抵抗の姿勢を語り伝えてきたのに他ならないからです」という一文を引用し、

「権力者」「外敵」としての虎が「力の弱い者に退治される話」(足立・李 2008: 72)。

としている。このように『あずき』では虎を民間・民衆＝ばあさんとは相対峙する権力者・外敵と考えているからこそ、ばあさんは補助者の力を得ても自らは直接「トラ」と闘わないのだろう。この点で「さる」と「トラ」の性格は決定的に異なっている。つまり、反対者としての「さる」と「トラ」は、どちらも両義的な性格を持ちつつも、猿は「俗」的な性格、すなわち世間一般・民間的性格であり、虎は「権力者」「外敵」という世間一般・民間ではない性格がやはり昔話では目立つことがうかがえる。この点、小澤(1983: 35)を参照されたい。

次に、本稿は昔話「絵本」の構造分析をしていることから、『かに』と『あずき』に出現する同じ補助者について特に焦点を当てたい。行為項分析で、補助者として登場し下線部を引いた牛の糞：うんち、石臼：石臼であるが、登場シーンを絵で示しながら分析する。まずその前に、『かに』は縦長判(ドゥーナン 2013: 146)の絵本であり、右開き左に話が進行する(藤本 2007: 159)。テキストは縦書きとなっている。これに対して、『あずき』は横長判(ドゥーナン 2013: 146)の絵本であり、左開き右に話が進行する(藤本 2007: 62-3)。テキストは横書きとなっている。これを踏まえて、以下絵を示す。

『かに』の牛の糞は黒い丸として表現されており、道の真ん中に貼りついているように描かれ、子蟹どもと栗及び蜂が牛の糞に近づいて行く様子が絵で見取れる(図1)。これに対して、『あずき』のうんちは黄土色で表現されており、婆さんのほうに出向くのであ



図1 『かに』 pp.28-29

るから手と足があり動くように左から右へと描かれている。小豆粥をもらう時は、何かに座って婆さんに食べさせてもらっているように描かれている。また鳥が止まっている屋根が土間と思われ、その床に寝そべったのが分かる(図2)。

『かに』の石臼は灰白色で、一つの石でできており、大きな穴が開いているように見受けられる。子蟹どもは両面見開きにいっぱい広がる様子で描かれている。はぜ棒と蜂に関してはこの絵ではっきりしないが、栗に関しては移動してきた動線が描かれており、右から左へと移動してきたことが分かる。石臼は右開きの左進行方向で出会うのであるから、一番左に描かれている(図3)。これに対して、『あずき』の石臼は黒色で、回す取手が付いている碾き臼の一種である。左開き右進行の方向で婆さんと出会うのであるから、左から転がってきていることが絵から見て取れる。石臼も婆さんに小豆粥を食べさせてもらい、土間の外の戸口にぶらさがったのが分かる(図4)。

このように、テキストでは同じ補助者が『かに』と『あずき』で登場する。しかし、絵本自体の縦・横の違いや、進行方向の違い、テキストの縦横の違いで、同じ属性を持つだろう補助者であっても、絵があることで明確に異なっていることが分かる。ここに絵と言葉の相互作用(Bader, B. 1976: 1, ニコラエヴァ&スコット 2011: 12-3)を見ることができ、「昔

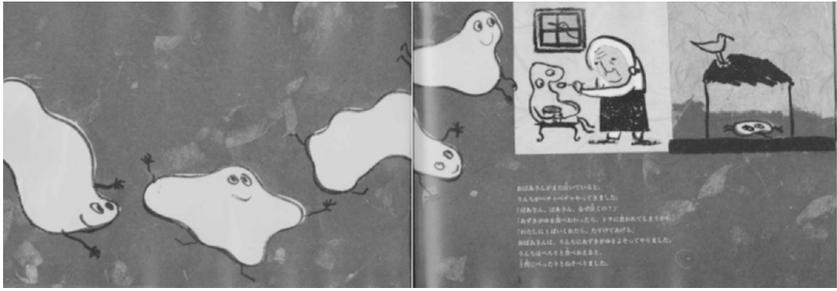


図2 『あずき』 pp. 10-11



図3 『かに』 pp. 32-33

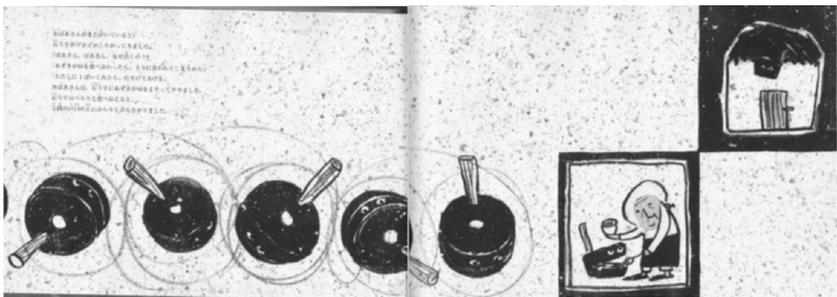


図4 『あずき』 pp. 14-15

話絵本」の特徴があると思われる。

### 3.3 考察

以上のように、行為と行為項に分けて構造分析を試みた。登場人物の行為は「対抗開始」「出立・出発」は『かに』のみに見られる機能ではあるが、グレイムによる二項対立の構造分析図によって『かに』と『あずき』の類似性が明らかになった。また、行為項分析から『かに』と『あずき』の登場人物である反対者の「さる」と「トラ」はどちらも両義性を持ちつつも、『かに』の方では、猿は俗的性格がよりはっきり表れ、主体である蟹とは力の上下関係がありつつも、蟹が直接闘いに挑んでいる。これに対して『あずき』の方では、虎は権力者・外敵であり、民衆・民間である婆さんは直接闘わず補助者が担ってくれた。虎は負け、婆さんが幸せにくらしたとなっている。登場する主体と反対者が全く異なることで、日本では世間一般・民間同士の採め事を昔話のコンテクストに乗せているのに対して、韓国では権力・外敵対世間一般・民間、つまり朝鮮の身分制度である両班(支配階級)対サンノム(賤民)のコンテクストに乗せて風刺しているのであり、その違いが顕著に表れたと判断できる。ただ、韓国の昔話に登場する虎の含意については諸説(崔 1976: 113-4)がある。『かに』と『あずき』で重なる補助者についても絵を併せて比較してみるとその差異が表われた。日韓の文化的独自性が明らかになったと思われる。

以下では構造分析を踏まえた上で、声の文化からの考察を試みる。

## 4 声の文化からの考察

絵本も出版物=印刷物であるので、オング(1991: 301)の主張からすると、閉じられたテキストとなるはずである。すなわち、作者=テキストの作り手は生の聴衆を考えないということになる。しかし絵本は読み聞かせ・読み合いを基本とする読み物である。読み手は作者ではないが、作者の声を伝達する役割を果たす者と考えることもできよう。もし、このように考えられるのであれば、作者はやはり聴衆である多くの子どもを含めた読者=聴者を考慮にいれると考えてよいであろう。読み手はもちろん作者ではないが、声の文化における口誦の演じ手をもつ感覚を持つものともいえよう。とりわけ昔話においては、声で伝承されてきたものであることから、絵本という媒体になっても、声が重要な役割を果たすからである。そこで、声の文化における登場人物、書くこと・印刷がもた

らした登場人物の変化が、昔話絵本の構造分析と如何に関わるのか。まず、声の文化における物語に登場する人物はいわゆる、平面的な性質を持つとオングは語る。

型どおりの登場人物は話のすじそれ自体をつくるのに役立つとともに、物語のなかにあらわれる非物語的な要素をうまく話のなかにとりこむのに役立つ(オング 1991: 309)。

このことから分かるように、『かに』と『あずき』両者の話のすじ、つまり機能としてのメタ言語が似通っていても、登場する主体・反対者・補助者は非物語的要素であることから、話のなかにうまくとりこむことに役立つのである。したがって、昔話が声によって伝承される、声の文化であることが分かる。

ただ、声の文化であった昔話が書きとめられ、さらには絵本になっても、その登場人物の平面的な性質は完全になくなるのではない。この点、オングは同書でさらに語る。

書くことと印刷は、平面的な登場人物を完全にお払い箱にするわけではない。ことばの新しい技術は、古い技術を強化し同時にそれを変形するという原則のとおり、書く文化は、実際、ある意味で型どおりの登場人物の縮約版をつくりあげる。つまり、抽象的な登場人物である(オング 1991: 312)。

このような抽象的な登場人物であれば、書きとめられることには耐えうるし、印刷という絵本の形状になったとしても、それはやはり耐えうるのである。なぜならば、抽象的な登場人物の段階では、その性格などは綿密にテキストに書かれる必要はない。つまり、善と悪と言ったような抽象的な登場人物であればたりうることになる。構造分析での行為項分析で見たような、主体と反対者の関係であろうか。すなわち、『かに』でいうところの蟹・子蟹と猿の抽象的な善と悪であり、『あずき』でいうところの婆さんと虎の抽象的な善と悪である。

そうであるならば、絵本が読み聞かせ・読み合いを基本とする読み物であるということも首肯することができるだろう。その理由として、もう一度オングを引用しよう。

古代以来ずっと、そして十八世紀になってもまだ、多くのテキスト、たとえば書くこ

とによって作りあげられたテキストであっても、公衆の前で朗読されるのが一般的であったし、もともとは著者みずからが朗読するものであったということである(オング 1991: 320)。

声に出して読まれることが、つねにレトリカルなスタイルを決定し、プロットと登場人物の人格描写の性質を決定していたのである(オング 1991: 321)。

ここでは、昔話が絵本という媒体になっても、それは公衆の前で読まれることを前提として作られている。もちろん著者がみずから読み上げるという点については、絵本はそのように読まれるわけではない。しかし、構造分析の行為分析で見たように、声で読まれることが『かに』と『あずき』のプロットを決定しており、『かに』のみに見られる出立・出発からは、「かにどん かにどん、どこへ ゆく」、「さるのぼんばへ あだうちに」というような日本独特の声の調べと結びついている。また、構造分析の行為項分析で見たように、『あずき』に出現する登場人物たる婆さんと虎の描写は、韓国独特の人物描写となっているのである。

## 5 おわりに

そもそも、『かに』と『あずき』を黙読する段階で、この両者が似ているということにあまり気が付いていなかった。フィールドワークに行っている家庭文庫で『かに』を読み聞かせして頂いて、はじめてこの両者の「なにか」が似ていると気づかされたのである。「なにか」は機能たる行為であることが分かり、気づかない段階ではおもに登場人物の差異、つまり可変項である行為項に目が奪われていたのだろう。

可変項である行為項を取り除いた時、『かに』と『あずき』の定項である機能はその類似性を露わにする。可変項である行為項を付け加えると、語る者・語られる地域及び国によって、もっとも好まれる形として昔話はその姿を表し、文化の独自性を色濃く表わすのである。特に媒体が絵本となると、その特徴である絵と言葉の相互作用と相俟って「昔話絵本」が形作られる。

もとより、昔話は口で伝えられ、それが書きとめられても、そこに秘められた声の重要性は変わることなく、また絵本になったとしてもそれは変わらない。しかし、昔話の背景

や登場人物は、現代の文字の世界にいる我々にとって、もはや声だけではイメージできなくなっており、「昔話絵本」という形式こそが我々を声の文化へと引きもどしてくれるのである。

#### 註

- (1) 本註を含むグリムの「親指こぞう」、日本の「親指太郎」は、いずれも親指ぐらいの小人が登場し、活躍する話となっている。
- (2) 読み手はひとりで、聞き手が多数の場合を読み聞かせといい、同じく読み手はひとりで聞き手がひとりまたはふたりの場合を読み合いという。読み合いの場合は、子どもを膝に乗せ同じ方向から絵本を見るようになる場合もある。
- (3) 31種類の機能とは以下のものである。1 不在、2 禁止、3 違反、4 偵察、5 漏洩、6 策略、7 策略の成功、8 加害・欠如、9 仲介、10 対抗開始、11 出立・出発、12 補助者の第一機能、13 主体の反応、14 魔法の手段の取得・獲得、15 目的地への移動、16 闘い、17 烙印、18 勝利、19 欠如の解消、20 帰還、21 追跡、22 救助、23 気づかれないでの到着、24 偽の主体の主張、25 難題、26 解決、27 主体の認知、28 偽の主体の正体暴露、29 変身、30 偽の主体の処罰、31 結婚。
- (4) 『日本昔話大成』第1巻、「四 動物競争」、「五 猿蟹合戦」とは構造・内容ともに共通する、とされている。
- (5) ペク・ヒナの作品は2016年『天女銭湯』、2017年『天女かあさん』が続けて長谷川義史の翻訳でプロンズ新社より出版されている。なお、本稿では日本で翻訳出版されている『あずき』を取り扱っている点異なる。

#### 参考文献

- 足立悦男・李銀普(2008)「日韓民話文学の比較研究——『かにむかし』と『갈죽 할떡과 호랑이』」  
—— 島根大学教育学部附属教育支援センター紀要第7号、pp. 65-79
- 池上嘉彦(1982)『ことばの詩学』岩波書店
- 小澤俊夫(1983)『昔ばなしとはなにか』大和書房

- 関敬吾(1979)『日本昔話大成』第1巻、角川書店
- 関敬吾(1978)『日本昔話大成』第3巻、角川書店
- 崔仁鶴(1976)『韓国昔話の研究』弘文堂
- 藤本朝巳(2007)『絵本のしくみを考える』日本エディタースクール出版部
- W・J・オング(1991)『声の文化と文字の文化』桜井直文・林正寛・糟谷啓介訳、藤原書店
- A・J・グレマス(1988)『構造意味論』田島宏・鳥居正文訳、白馬書房
- アラン・ダンダス(1980)『民話の構造』池上嘉彦他訳、大修館書店
- ジェーン・ドゥーナン(2013)『絵本の絵を読む』正置友子・灰島かり・川端有子訳、玉川大学出版部
- マリア・ニコラエヴァ&キャロル・スコット(2011)『絵本の力学』川端有子・南隆太訳、玉川大学出版部
- ロラン・バルト(1979)『物語の構造分析』花輪光訳、みすず書房
- ウラジーミル・プロップ(1983)『昔話の形態学』北岡誠司・福田美智代訳、白馬書房
- Barbara, Bader, 1976, *American Picturebooks: from Noah's Ark to the Beast Within* Macmillan Publishing.
- 木下順二 文、清水崑 絵(1976)『かにむかし』岩波書店
- グリム童話集(上)(2007)「親指こぞう」佐々木田鶴子訳・出久根育絵、岩波少年文庫
- チョ・ホサン文、ユン・ミスク絵(2004)『あずきがゆばあさんとトラ』おたけきよみ訳、株式会社アートン
- パク・ユンギョ 文、ペク・ヒナ絵(2006)『팔죽 할머니 호랑이』시гон지니어
- ホン・ヨンウ 文・絵(2012)『チョマギ』出版社ポリ

(ゆんへじょん／博士後期課程)

This work was supported by the Core University Program for Korean Studies through the Ministry of Education of the Republic of Korea and Korean Studies Promotion Service of the Academy of Korean Studies (AKS-2016-OLU-2250001).